

## 明治期神道實行教の海外進出 ―『惟一』の記事を中心に―

今井功一

富士講系教派神道の一である實行教は、明治期において海外での活動を強く意識していた。それは、實行教が一八九四（明治二七）年～一八九八（明治三一）年に刊行していた雑誌『惟一』に掲載された記事から見て取ることができる。この時期に実際に實行教が何らかの活動を行い、それを『惟一』誌上で宣伝したのは、シカゴ、朝鮮、台湾であった。

### 研究発表

シカゴ万博にあわせて一八九三（明治二六）年に開催された世界宗教会議には、實行教管長柴田礼一がただひとりの神道代表として参加した。成功体験として記憶され、会場で行われた柴田の演説の素晴らしさとそれを賛美する会議の参加者という描写で『惟一』誌上で様々な形で言及され、後年まで語り継がれることになる。会議を契機に知遇を得た米国人とはしばらくの間交流があり、来日外国人が實行教本館を訪れたり、書簡を誌上で公開したりすることが続くが、それらを足掛かりに本格的な米国進出等は行われなかった。

一八九五（明治二八）年には、日清戦争を契機として、朝鮮に管長である柴田礼一を、台湾に布教使として幹部一名をそれぞれ派遣した。『惟一』誌上では、「布教通信」というコーナーが用意され、朝鮮巡教は「西征録」、台湾派遣は「台湾開教」というタイトルでそれぞれ報告が連載された。派遣に先駆けて、『惟一』誌上では、他派も含む神道家一般へ向けて、日清戦争の占領地への布教使の派遣を呼び掛ける文章が複数掲載されており、（一）戦死者の慰霊、戦傷病者の慰問に神道家が必要であること、（二）神道各教派は仏教、キリスト教に遅れをとっていること、といっ

一八九五（明治二八）年四月、柴田礼一は、随行者であり「西征録」の記者である信徒・田中塵外を伴って東京を出発し、国内各地を巡教しながら向かい、下関条約締結後の五月の二週間ほど朝鮮に滞在した。「西征録」の連載は、第一五号（同年四月）から第一九号（八月）と五回に及んだが、初回と二回は出港まで国内をめぐる行程、三回と四回が朝鮮入国後の釜山や漢城での行動、五回が朝鮮を出港してからの帰途についての報告であった。

派遣に先立って『惟一』誌上に掲載された特集記事では、その目的は、（一）朝鮮に派遣された軍隊の慰問、（二）戦死者の慰霊と現地人々の教化であるとされた。しかし、田中の報告によれば、五月六日に仁川に上陸して以降、日本公使館井上公使訪問、京城守備隊独立第一八大隊を慰問、宝丹五〇〇包を寄贈、官立日語学校参観、朝鮮宮内軍部の顧問官岡本柳之助と会見、仁川の兵站部を慰問、副官田中中尉に宝丹一〇〇包を寄贈、釜山の兵站部を慰問と、約二週間の柴田の主な行動は、現地の日本政府機関の訪問や軍隊の慰問に限られ、必ずしも現地の人々の教化という目的に適う活動は行われていない。

次いで、台湾へは岐阜の幹部である大教正・北條三野夫を「近衛師団従軍布教慰問使」として派遣した。「台湾開教」は北條による現地からの報告である。第二三号（一八九五〔明治二八〕年二月）に「台湾布教使の第一回通信」が掲載されて以降、第三二号（一八九六〔明治二九〕年二月）の「第八、九回通信」まで断続的に掲載された。北條は一月一六日には基隆港に到着。上陸後は病院や駐屯地を慰問、台湾各地に進軍する部隊にも新聞記者らと同行した。何人かの他教、他派の教師等と行動を共にしている場面が報告されており、北白川宮能久親王の追悼祭を真宗本派本願寺慰問使三等巡教使小野島行薫、神宮教布教使権大教正甲斐一彦とともに総督府門で実施したことや、真宗興正寺派や浄土宗の僧侶とともに、神仏各派合同の慰霊祭を行ったことを報告している。台湾到着直後に北條が台湾総督府

研究発表

に提出した「布教意見書」には、彼の目的が島民教化や教会所設置である旨が記されている。教会所着工の報告もされたが、活動は各地で帯同する部隊の戦病死者の弔祭が主であり、島民教化については具体的な報告はなされなかった。

柴田と実行教は、特にシカゴで行われた万国宗教会議に神道代表として出席して以降、海外への進出を強く意識していたと考えられる。二つの海外派遣は、軍隊の慰問と戦死者の慰霊、現地の人々の教化のためという二つの意図をもって実施されたものであった。しかし、実態としては、この時期の諸活動はあくまで単発で彼らの意図した継続的な活動につながらなかった印象が強い。現地の人々との直接的な接触はほとんどなく、教化を目的に挙げながらも、特に併合後の台湾では負傷者の慰問と戦死者一六四名、病死者四六四二名にのぼる死者の慰霊という問題が彼らの役割として現場から求められたものであり、主な活動とならざるを得なかった。